

映画の小箱

思春期の少年が、初めて恋を知る
1970年代、文化大革命の嵐吹く北京にも、
束縛されない自由があった。

『太陽の少年』 あの懐かしい においが伝わる

金丸弘美=文
text by Hiromi Kanamaru
山下勲男=写真
photographs by Isao Yamashita

あまりにも美しい。色が澄みきっている。そこにはすがすがしい、空気がある。空気の香りさえしてくるようだ。

におうという表現はへんかもしれないが、映画の隅々から、なんだか、懐かしいともいえるにおいが伝わってくるかのようだ。そのにおいとは、畑や道のわきに生えている草木や、木造の家や、主人公たちの汗や、風を切って走っていくときの漂う町そのものだったりする。

そこには抱きしめてしまいたいような、土埃的な手触りの感触ともいえるものがある。なんだか、小さい頃に嗅いだ、日溜まりのにおいに似ている。

なぜ、そんなふうに感じてしまうのだろうか。ここには、純粋に少年や少女だった時代の空気が見事に描かれ、そこに少年や少女たちの息遣いが聞こえているからにほかならない。

舞台は、一九七〇年代の北京である。当時の文化大革命の様子は、表面では革命的な新

しい文化の錦のように喧伝されたが、実際は、軍の指導のもとに、文化もイデオロギーも一色にされてしまい、そのために、指示に従わない人々は、いわれない罪に陥れられ糾弾されるといふ不幸を生んだ時代だった。そのことは、新しい中国の映画作家たちが、『芙蓉鎮』（一九八七）、『さらば、わが愛／霸王別姫』（一九九三）などでも、描いている。

ただ、この『太陽と少年』は、同じ時代でも、視点がかなり違う。町の青年たちが、文化大革命の中、国の方針によって、農村に駆り出され、また、主人公の父親は軍人で、革命の推進という命題をもち、軍に所属して、家にはほとんどいない。北京の町に残ったのは、少年や子供たちである。その少年たちは、まったく国の思想にも関係なく、自分たちの空気を満喫し、気ままに遊びに興じ、自分たちの少年という時間を伸び伸びとフィルムの中で生きているのである。

主人公のシャオチュン（シア・ユイ）は十



六歳。勉強が嫌いだ。彼たちにとつて、学校の先生の熱弁なんて関心はない。それよりも、興味は先生をからかうことだ。

母親の「おまえみたいなでそこないは知らない」と激怒する声も、その場限り。どんなに怒鳴られても、遊びが第一だ。

一人での遊びは、父親の部屋に入つての勝手な軍隊ごっこやコンドームの膨らまし。それに合いかぎを作つて、部屋のかぎを開けること。ついには、遊びが高じて他人の家に侵入し、勝手に人の家の饅頭を食べたりということにまでなつてしまふ。どの家も、男も女も成人者はみんな労働や軍隊に駆り出され、だれも帰つてこない。学校を抜け出したら、町の他人の昼間の家はシャオチュンの天下で、だれも知らない自由な場所である。

外に出での遊びは、仲間の男の子や女の子とのたばこや、隠れ家での女の子が男の子にキスマークをつけるキスごっこ。それに自転車での、町内散策である。

シャオチュンたちと似たようなグループが別の町にもいて、ある日仲間がやられたというので、みんなで、襲撃にでかける。これが、大きな対立になりかけたりもする。

そんな遊びが日常になつていくシャオチュン

ンだが、ある日、他人の家に入ったときに、一枚の女性の写真を見つける。彼女の魅力に引きつけられたシャオチュンは、何度も彼女の家に忍び込み、次第に心を引かれていく。そしてとうとう町を歩く本物の彼女に会つた。話しかけてみたが、シャオチュンは子供扱いで、相手にされない。そうなる、ますます、思いがつのる。

彼女ミラン（ニン・チン）に、ようやく話を付けて、まるで恋人になつたよう。シャオチュンは、得意気に仲間に紹介する。ミランはシャオチュンの仲間と遊ぶようになるが、仲間のリーダーのイクトと、ミランが、だんだん仲がよくなつてきた。シャオチュンとしてはたまらない。思いをぶつけることがなかなかできなくて、仲間にも反抗的な態度をとるようになる。シャオチュンは、初めて恋ということを知るのである。

思春期の少年たちの時間が見事に生き生きと描写される。

それが、あまりに丁寧で、主人公たちの気ままさが、ストレートに表されているだけに、国を時代を超えて、それぞれに過ぎ去つた少年時代に呼びかけてくるのだろう。そこには、なにもにも束縛されない、自由が息づいているかのようだ。

『太陽の少年』

(中国・香港映画/大映(株)、東光徳間、ツイン) In The Heare of the Sun 1995年

監督=チアン・ウェン

出演=シア・ユイ/ニン・チン/コン・ラー/

ワン・シュエチー/スーチンウォー